

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## ダブル・ビジョン

2002年・香港、台湾、アメリカ映画・109分  
配給/ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

2003 (平成15) 年4月2日鑑賞  
〈ソニー・ピクチャーズ試写室〉

Data

監督・脚本・制作: 陳国富 (チェン・クォフ)

出演: 梁家輝 (レオン・カーファイ)  
/デビッド・モース/劉若英  
(レネ・リュウ)/載立忍 (レオン・ダイ)

## 👁️👁️ みどころ

・ダブル・ビジョンとは道教の教えにある一つの目に二つの瞳をもつ超人のこと。道教の「五つの地獄」に沿った怪奇な殺人事件をテーマにしたサイコ・スリラー映画。「セブン」や「リング」のような映画の好きな人には絶対のおすすめ。しかしパンフレットを読んで道教の勉強をすることが不可欠だ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* —

### <難解な香港=台湾=米国合作映画>

この映画のうたい文句は、「セブン」(謎)、「リング」(恐怖)、「シックス・センス」(感動)を超えるサイコ・スリラー!とある。確かにその通り。しかしとにかく難解このうえない。そしてまた非常に恐ろしい映画。

### <中国の道教とは>

道教は不老不死、すなわち永遠の生命を得た仙人になることを理想とする宗教であり、パンフレットによると、その内容は次の通り説明されている。すなわち、

「その方法は、大きく二つに分けられる。一つは外丹法といい、錬金術によって黄金を作りこれを服用する。この不死の薬を金丹ともいう。もう一つは内丹法といい、気や神を瞑想して「道」(タオ)と一体化する方法。現在の気功の源流でもある。いずれも、厳しい自己修養と修行によってのみ成就することができる。さらに、道教では、特に悪徳や不善を忌み、それらは人の生命を損うものと考えられた。例えば人間は、もともと百数十歳ほどの寿命をもって生まれてくるが、その半分も生きられないのは、その人が罪を犯したために寿命を削られたからという。つまり。死とは罪や悪行の結果であり、そのために人は死後地獄におちて罪を償うのである」。

このパンフレットを読めば、何となく分かったような気になるものの、よく考えれば、やっぱり分からない。

## <ダブル・ビジョンと五つの地獄>

「ダブル・ビジョン (Double vision) (双瞳)」とは、道教に出てくる、一つの目に二つの瞳を持つ超人のことを意味しているとのこと。そしてダブル・ビジョンを持つ超人は、五つの地獄 (氷地獄、火炎地獄、腹裂き地獄、心臓抜き地獄、舌抜き地獄) を行った後に強力なパワーと永遠の命を持つ存在となるといわれている。この映画はこのダブル・ビジョン伝説を基にした、怖い怖いサイコ・スリラー映画だ。

次に、道教でいう五つの地獄とは、①貪欲なものがおちる「寒氷地獄」(カンピョウジゴク) (氷責め地獄)、②情欲に走って家族の紛争を起こすものがおちる「焼手足地獄」(ショウシュソクジゴク) (火焰地獄)、③口先だけの不誠実なものがおちる「抜舌地獄」(ハツゼツジゴク) (舌抜き地獄)、④父母の遺産を争うものがおちる「穿肋地獄」(サクロクジゴク) (胸裂き地獄)、⑤法律を犯したものがおちる「抽腸地獄」(チュウチョウジゴク) (腸抜き地獄)をいうとのことだ。日本では、地獄は仏教の教えの中にあるものと思われているが、実は、道教で説かれた死者世界と、仏教の因果応報の思想が混ざり合って、5～6世紀に中国で作られた死後の世界が地獄であり、仏教本来の教えではないとのこと。そして代表的な地獄は道教でいう五つの地獄を含めて24種類ほどあり、「尖刀地獄」(セントウジゴク) (針山地獄) や「血汚池」(血の池地獄)などは、日本でも馴染の深いものだ。

また有名な「閻羅 (エンラ) 大王」は、この五つの地獄を主催するもので、死者の犯した罪を審判して、どの地獄に送るかを決める審判官である。従って「閻羅大王」に嘘の申告をしてもすぐに見破られるから、「嘘をつくとも閻魔様に舌を抜かれる」などと伝えられているわけだ。

台湾や香港などでは、道教の寺院に行くと、このような地獄の様子が絵に描かれており、人々の戒めとなっており、また、本が無料で配られているから、大抵の人は地獄の内容を知っているということだ。

以上はパンフレットからの引用だが、実に興味深い勉強ができる。

## <サイコ・スリラーの好きな人には絶好の作品>

映画の冒頭は、1人の妊婦の帝王切開のシーン。手術台に足を広げられた妊婦の腹がメスで切りさかれ、血にまみれた赤ん坊が取り出されたが、「死産だ!」との声。そして続いて「もう1人いるぞ! 双子だ!」との声。そしてカメラは死産の赤ん坊の目をクローズ・アップで撮していく。

私はこういう怖い映画や恐ろしいシーンは大の苦手。本当は目をつぶってしまいたい位

だ。しかしそれではストーリーが分からなくなるので、目を細めて、できるだけ怖いものは見ないように、しかし筋は把握できるように、「観て」いる。従って、この恐ろしい出産シーンや死後の子供のシーンは、ボンヤリとしか目に残っていない。

そして、この冒頭のシーンは「ダブル・ビジョン」というタイトルの通り、大きな意味を持っていることが最後にわかる。もっともその解説をここですることはほとんど不可能だから、興味のある人は是非映画を観てもらいたい。私はこの手の映画は好きではないが、サイコ・スリラー映画の好きな人にはきっとこの映画は面白いはずだし、かなり高水準の出来だと思う。

パンフレットに堤幸彦氏が書いていた次の文句は最高の賛辞だと思うし、これは決してお世辞ではないはずだ。すなわち、

「やられた。たぶん私はあと3回見る。1回目はプロデューサーや脚本家たちと“ストーリー”を。2回目はカメラマンや照明家と“映像”を。3回目は自分ひとりで“自分の興奮”を観るのだ。」

### <ラストはちょっと感動的>

呪文のような漢字が並べられた石碑や石盤から、次々と五つの地獄を連想する奇怪な殺人事件が発生し、これはとても人間や科学の手には負えないと思えてくる。主人公のホアン刑事（レオン・カーファイ）とコンビで犯人捜しのために、アメリカのFBIから派遣されたケビン・リクター捜査官（デビッド・モース）も、舌を抜かれた状態で死亡した。そして遂にホアンも、「双瞳」の少女と「対決」の拳句、死亡してしまった。しかしそのそばで、「絶対にホアンは死んでいない！生き返って！」と呼ぶ妻のチンファン（レネ・リュウ）。そんな中、死んだはずのホアンの目に涙が流れてきた。そして最後に漢字の石盤から浮かんでくる四つの文字は「愛有不死」—愛有れば死なずだ。このラストは分かりやすく、ちょっと感動的だった。

2003年（平成15）4月3日記